

## 旅のニオイは吐き捨て

㊦ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

日本を離れてフランスまでやって来ると、とたんに忘れてしまうことがある。それは、日本の社会で感じさせられた異常なまでに過剰な対人関係の意識だ。すでに飛行機に乗った時から、もうそんな意識は頭になく、フランス人ホステスとの会話も至極ノンビリしたものになっている。

空港の外に出ると、さっそくタクシー運転手との会話が始まる。日本にいた時よりも、相手の顔はごく近いところにあるのだ。車のトランクに荷物を詰め込むのを助けながら、彼はぐっと顔を接近させて話しかけてくる。日本のタクシー運転手とこれほど近い位置で言葉を交わしたことはない。

こんなふうにして、フランスでの生活が始まるのだが、日本で人々と話をする距離感とは明らかに違っている。みんな一歩踏み込んだところから、何のこだわりも遠慮もなしに言葉を浴びせかけてくるのだ。

とりわけ久しぶりに親しい友に出会ったりすると、抱擁から始まって、顔が触れ合いそうな間隔でのお喋りが始まる。日本では意識過剰になっていた様々な行為、たとえば相手に息を吹きかけはしないかとか、口がニオイはしないかといった類の気遣いなどもはや思い出しもせず、気楽で自由な会話の中に入っていくのだ。

前にもこのブログで書いたように、六年半のパリ生活で、フランス人の口臭を感じたことは二、三度しかない。それもごく軽いものだった。フランスの乾いた空気のせいではないかと思うのだが、私自身もそんなムードにすっかり慣れてしまって、なんの懸念もなく、ごく自然に相手の顔に言葉をぶつけているのだ。

それが、日本に帰ってくると、とたんに別の雰囲気になってしまう。自分の鼻や口に手をかざして話をする人に時々会おうのだ。おや、俺の息が？ などこちらが加害者意識を持たされてしまい、何となく正面きって喋ることに気おくれを感じてしまう。

それに、話をする者どうしの距離もかなり離れていることに気がついた。なにか日本人全体が神経質になっていて、相手に自分のニオイを感じさせまいとするような、或る種のエチケットを守っているように見えるのだ。

そう言えば、日本では、若い女の子たちがオジサン臭さを極度に嫌い、中年男の体臭や口臭に過度に反応するということだが、フランスではそんな話は聞いたことがないし、事例に出会ったこともない。

ビズー（キス）の習慣が盛んな国だから、女の子がそんなことを言ってオジサンから逃げたいなら、かえって社会から疎外されてしまうだろう。

私自身、フランスでは、若い女の子たちともごく自然に気軽に喋れるが、日本ではなにかイヤな顔をされそうな気がして、簡単には言葉をかけられない。向こうも、オジサンと口をきくのは極力

避けているような気がする。

パリの繁華街を歩いていたら、高校生ぐらいの女の子が私に何か話しかけてきた。ぐっと顔を近づけて、

「ムッシュー、私に煙草を一本くれませんか？」とささやく。

私が一本手渡すと、彼女は、近くにいた数人の仲間の方へ走って、

「きゃあ、貰っちゃった」と喜びの声をあげ、みんなと一緒に小躍りしている。どうやら、オジサンたちから煙草をもらって集めているらしいのだ。

煙草の火を貰いに来る若い女性も多いし、中には、こちらが街の写真を撮っていると話しかけてくる子もいる。オジサンと接近することを何とも思っていないのだ。

異なる年代や異性間の会話を可能にする、このような自然さはどこから来るのだろうか。接近や接触、ニオイなどといったものを異常に気にする社会ではどうてい得られない人間関係ではないだろうか。

日本のメディアにも、そういう神経質さを増幅するような傾向がよく見られる。「おじいちゃんのお口くさい」と子供が叫ぶコマーシャルがある。歯磨きの宣伝か何かだったと思うが、なぜ「おじいちゃん」の「お口」なんだろう。

「おじいちゃん」の口でなくたって、子供や若者の口だって、くさい時はくさい。私の経験では、小学校の時代から大学生活を通して、口の匂う奴はいくらでもいた。一方、私の義母などは、九十四歳で亡くなるまで、一度も匂ったことなど無かった。

日本のメディアは、必要以上に年配者を不安にさせたり、神経質にさせたりするような言葉を使いすぎと思う。それは、除臭剤や香料の宣伝に限らず、一般的な新聞記事やテレビ番組でも多く見られる現象である。

妙なところに国民性とも言える清潔志向が出てくるのを見ると、日本には意外に「隠れ清潔マニア」が多いことを思わせるのだが、これはむしろ病的な意味でのマニアである。

私は、「清潔マニア」という言葉を、清潔に情熱を持つ人、清潔に人一倍関心を持つ人という健全な意味で使いたいのだが、このレベルになると、何が真に清潔かということを見極め、必要な清潔を求めようとはするが、やたら神経質になって無益な価値基準まで持ち込むようなことはしない。

人間には、年齢によって、あるいは性別によって、ニオイがあるのは自然である。そのどこまでが許容されるかということになるが、病的なものでない限りは自然体と見なし、好き嫌いはあるにしても、或る程度は寛容になる必要がある。

オジサン臭さを嫌って、自分の父親をさえ避けようとする少女が、こと自分の大好きなペットのニオイになると、多少臭くても平気だなどと言い出す始末だ。こういう例を見ると、ニオイの好悪感情に先立つものが何なのかということがよく判る。

つまり、自分の好きなもの、愛するものだったら、ニオイなど大して気にならないのである。対人関係の意識がニオイから入るか、人間とその言葉への愛から入るかで、この違いが出てくるのではないだろうか。

フランスでは、乾いた空気が助けている側面があるかも知れない。しかし、それと同時に、お喋りが好きだ、友と楽しい会話のいつきを過ごしたい、相手の人間が大事だという意識が、自然的なニオイなど気にさせない何かを持っていると言えるのではないだろうか。

自由に、気楽に、顔つき合わせて話に没頭できるということが人間関係にとっては極めて重要なのである。相手をニオイで嗅ぎ分けるような動物的な次元ではなく、精神的な次元での結びつきを得るためには、言葉が必要である。

私の立場からすれば、不慣れな外国語で相手に自分の気持ちを伝え、また相手の言おうとしていることを理解しようとすることに懸命で、それ以外のことを気にする余裕など全く無かったとも言える。

言葉のやりとりにだけ熱中し、自分の身体的な状況などには気が及ばないというのが正直なところである。極端な言い方をすれば、自分がどんな息を吐いていようが、そんなことはあまり気にならない。ただ、相手と交わす言葉にだけ意識が集中しているといった状態なのだ。

日本語で話す時には、自分の身体的な条件や話をする態度、行動など余計なものにまで意識を向ける余裕がある。その代わり肝心の言葉のほうは上滑りになって、遠くを走っているということも多い。

フランスでは、言いたいことを伝えるだけで満足し、それ以外のことは忘れてしまうと言ってもよいのだが、それにはもう一つ理由がある。私には、自分が旅行者だという気分がどこかにあって、相手に与える一時的な印象にはあまり囚われないという気楽さがあるのだ。

それが、かなり大胆で自由な喋り方を許していると言える。大事なのは人間どうしの対話なのだから、些末なことはどうでもよいという、一種の解放感があるのだ。悪く言えば、旅の恥はかき捨てといったところだろうか。

この解放感が、私の意志をも自由に解き放ってくれる。日本で感じていたこだわりや遠慮の意識から解放され、好き勝手なことを喋りまくる。

そして、面白いことに気が付いたのだ。私のフランス人の友たちも、最初から同じような解放感の中にあって、何のわだかまりもなく自由に喋りまくっているのだ。

相手に息を吹きかけることも、時にはツバを飛ばすことも気にかけない。もっぱら会話の中に没入し、言葉を追いかけることに専心しているのだ。この意志の転換はどこから来るのだろうか。

フランスの薬局でもエクストリルというウガイ薬がよく売れていることは以前にも書いた。彼らも口臭を気にしていないわけではないと思う

しかし、いったん喋り始めると、そんなことは全く意に介さず、会話を楽しむことに集中できる秘密はどこにあるのだろうか。

乾いた空気という外側の要因の他に、何か意志的にコントロールできる内側の要因があるのだろうか。私は、フランスでの生活を参考にして、身体的な条件の多くは意志的に克服できるというこ

とを、次回に書いてみようと思っている。

[2008/02/10 magmag]